
ラストソード

Asakkyo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストソード

【Nコード】

N0779BA

【作者名】

Asakkyo

【あらすじ】

病に倒れ、以来学園の寮で眠り続ける妹を助けるべく、マトは学園長の許可を得て、旅に出ることに。

目指すは、どんな病も一瞬で治すという伝説の聖剣があるという幻の都市―サムライタウン。

果たして彼は、妹を救うことができるのか――?!

少女は眠る

夢を見る。毎晩、毎晩、見る夢は同じ。俺を苦しめるその夢には、美しくも儚く散る白百合の花が毎回現れる。その花から涙が零れ落ちる時、俺は目を覚ます。

「またか。これで何回目だか」

俺が思うに、その花はきつと妹なんじゃないかと。

隣で眠る、透き通るように白い肌が自慢の、金髪の美女を見つめながら、俺は今日も起き上がる。

そこに居るのは、俺の妹のアリス。アリスは昔っから人懐っこくって、時々見せてくれる笑顔がたまらず愛らしい。

そんな彼女の笑顔を見れる日は、もう来ない。何故ならば、彼女は何者かに襲われ、罹ったら永遠に治らないといわれている病に倒れたからだ。俺は、大切な妹のアリスを守りきれなかったのだ。だから、彼女はこうして今も眠ったまま、その愛おしい瞳を閉じたまま、俺にあの頃見せてくれた素敵な笑顔を見せられないのだ。

——悔しい。

正直、このまま彼女を、最後の鼓動が鳴り響くまで見守るわけにはいかない。そう思うようになったのは、アリスが倒れてから10年経った現在^{いま}なのだ。

「ごめんよ、アリス」閉じたままのその瞳を見て、俺は言う。

許してもらえるなんて思ってたない。

でも、償いだけはしてやりたい。

守れなかった償いを。

「ごめんよ、アリス。悪いのは俺だ。全部、俺のせいなんだ」
彼女の耳に、——否、心に、届いているかなんてわからない。
でも、謝りたい。一生懸命、俺のしたことを償いたい。

だから俺、決めたんだ。

これだけは許してほしいな。

「アリス、聞いてくれ。良い話だ」眠る少女に語りかける。

「俺な、どんな病も治してくれる聖剣を探しに、旅に出ることにしたんだ。もし、見つけたら、お前の病を治してやるから、それまで、待っていてくれないか。お願いだ」

眠る彼女のベッドの前で、黴臭い床に頭を擦りつけ、土下座をする。

「この通りだ。許してくれ、アリス……！！今まで、ずっとお前のそばに居たんだ、ちよつとの間だけでも、良いだろう？」

俺は震えていた。腕に相当、力が入っているらしい。その震えを無視し、俺は顔を上げてみる。

「アリス……？」

やはり、眠ったままだ。

——でも、俺はもう決めた。

「アリス、俺、お前のこと絶対、裏切ったりしないから。帰ったら、ずっとお前の傍にいてやるから。お前が目覚めたら、俺はもう旅なんかしないから。ずっとお前と一緒にここで卒業の日が来るまでずっと一緒に居よう。卒業してからも、別の土地と一緒に引越して、そこでずっと一緒に暮らそう」俺は、目覚めぬ少女を見つめたまま言う。

「約束だ。約束した以上、守るよ。だから、許せ」

最後の一言は、掠れてしまったが、思いは伝わるだろう、きっと。立ち上がると、俺は最後に、眠り続ける少女を見ると踵を返し、自分のベットのの上に並べた荷物を背負うと、自分と大好きな妹の部屋の扉を開けた。——新たな希望と、絶対の約束を胸に。

少女は眠る（後書き）

時空切取り師【マト】を一から書き直させていただいたものです。
タイトルも考え直し、このようになりました。

ご意見等あれば、活動報告にコメントください。

第1章 出会い 01

廊下を出れば、綺麗に磨かれた窓を介して溢れんばかりの日差しが、俺を出迎えてくれる。——見れば、そこには雲一つ無い晴れ渡る空と、天高く昇る太陽が。

「良い天気だ……」

廊下のど真ん中で、一人呟いた。

「言葉が返ってこないって、こんなに寂しいものなのか。——まあ、この時間に誰かとすれ違うことなんて、滅多にないしな。仕方ないといえば、仕方ないか」

なんてひとりごち、少しだけ誰かがこの廊下を通らないか待ってみたが、誰一人として来ないので、俺は真っ直ぐ学園長室へ向かった。

「入りなさい」

軽くドアをノックしてすぐに学園長の声がしたので、中に入る。

「失礼します」

ドアを開け、一礼。

「はいはい、そんないいから、早く来なさい」

めんどくさそうな言い方で、俺を手招きする学園長。

「相変わらず、いい加減なんですな、学園長は」

学園長はいつもこれだ。呆れてため息も出ない。

俺は学園長の机の前まで来た。

「私のことは気にするな。……で、今日はどうしたの？」

学園長は、新聞を眺めている。

「えーと、長期外出の許可を頂きたく……」

と、中途半端に言葉を切ると、学園長は新聞から目を離し、俺を

見つめる。

「おや。そうかい」驚いたのはその一瞬だけだったらしく、すぐに新聞に視線を戻すと、無精ひげを撫でながら、含み笑いをする。

「まあ、頭の可笑しい君のすることだ。許そう。社会面まで読んだら、下の階の者に連絡しとくよ。君はもう行きなさい。列車に乗り遅れるぞ」

「ありがとうございます。——それと、もう一つお願いが」
新聞から視線を逸らさぬまま、学園長が聞く。

「何だ」

「妹のアリスの面倒も、見てやってほしいのです」

学園長は無言で頷いた。

「わかっている。あの子のことは、私と理事長に任せなさい」

俺は最後に入り口で学園長に再度一礼すると、ドアを閉め、そのまま一階で必要な手続きを済ませ、そのまま駅へ向かった。

第1章 出会い 02

駅に着いた。

俺は今居るこのマジントン駅からサムライタウン駅へ向かうための切符を買うと、到着したばかりの始発のサムライタウン行きの列車に乗る。

途端に、列車の扉が閉まった。列車が動き出す。

入り口から一番近い部屋に入ると、ドアを閉め、窓際の腰掛に荷物を置き、その隣に俺は座った。

「ふう……」

マジントン駅からサムライタウン駅までの間には、35の駅がある。

俺が昔降りたことのある駅は、そのうちの3つ。この国——マジカランスの首都マジントンの西にある都市ウエストマジントン駅と東側に位置するイーストマジントン駅と、魔術書で有名なマーホロンの駅だ。

中でも、マーホロンは、中学校時代に妹のアリスと一緒に教科書を買に行った記憶がある。アリスは実技魔術の書をとても気に入っていたが、俺は実技が苦手なので、理論系の教科書を買ってすぐに熟読した。

今となつては、優等生だ。魔術のことは、大抵のことは知ってる。基礎から応用までしっかり俺の脳内には網羅されている。

……って、そんなことはどうでもいい。

日頃の疲れを少しでも減らそうと、軽く背伸びをしてから、窓に視線を向ける。いつの間にか列車はトンネルを抜け、イーストマジントン駅に到着していた。

「あれ……。もう、イメージまで着いたのか。早いなあ」

イメージとは、イーストマジントン駅の略称である。

「お腹空いたなあ……。って、今何時だ？」

窓の上に掛けられた時計を見ると、午後12時を回ろうとしていた。

「えっ。もうこんな時間?!」

記憶を辿ってみる。—— いったい、どうしてこんなに時間がかったのかを知るために。—— 一番時間がかかったのは、学園の一階での手続きだったような。その後は……、切符買ってから改札口に並んだよな。—— あ、そういえば、長い行列ができてたなあ。それもあるのかも。

「まあ、仕方ないな。予定より2〜3時間ズレるけど」

列車がまた動き出したと同時に、空腹と強烈な眠気に襲われた俺は、睡魔に負けて、眠りについた。

列車が止まる所為の揺れで目が覚めた俺は、真っ先に窓を見やる。

「あ。ここだ」

車窓から、太字でサムライタウンとあるのが見え、すぐに荷物を取って下車した俺は、改札口に繋がる階段を駆け下りていった。

サムライタウン駅は、この国で一番小さな都市である。また、この都市ではこんな伝説がある。

—— サムライタウンには、人の病を治す伝説の聖剣がある。

初めてその話を聞いた時は、そんなのはただの噂で、実はそんなものはいらないんだ。…… って、思っていた。

嘘ですよそんなの。 って、その伝説を知る先輩に言ったことがあった。そしたら、何を言ってるのかねキミは? というような顔で思い切り睨まれた。

だから俺は、信じることにしたのだけれど。

「本当にそんなものがあるのかねえ」

改札口を抜け、外に出れば、建ってから20年以上は経っていそうな、木造3階立ての屋敷が正面に見えた。

「さて……。どうしようかなあ」

とりあえず、右に曲がってみることにした俺。

実はこの時、その屋敷の2階の窓から誰かが俺を双眼鏡で見
ていたらしいが、全然気付かなかった。

第1章 出会い 03

道を右に曲がってしばらく歩いた先に、その家があった。俺は軽くドアをノックし、開くのを待った。

間もなくドアが開き、中から白髭を蓄えた老紳士が出迎える。

「やあ、マトくん。さあ、中へお入り」

俺の名を呼んだこの人こそ、偉大なる魔術師——マジントンの末裔で、切取り魔術を完成させた人なのであり、俺の地元のマジントンでは彼を偉大なる魔術師の子といわれている、らしい。

俺はそんな彼のことを師匠と呼んでいる。

「お邪魔します」

偉大なる魔術師の末裔——名前はマジエーク——は、笑顔で俺の中へ招き入れると、その偉大なる魔術師の末裔の証ともいえるような背中では、セーターとワイシャツの裏に隠された筋肉と骨の頑丈さをあらわしていた。

「どうぞ」

彼が案内した部屋は、20畳はありそうなりビングだった。

「好きなところに座って待ってて。お茶用意してくるから」

俺は近くにあったソファの端に腰掛けて、マジエーク師匠が戻ってくるのを待つ。

「俺もすごい人になりたいなあ……。新しい魔術でも考えようかな」

でも、俺には切取り魔術がある。これを上手く生かして何か新しい魔術を——。

なんてことを考えていたら、マジエーク師匠がトレイにお茶の入ったマグカップを2つ持って戻ってきた。

「ありがとう」

先に礼を言い、お茶を受け取る。

「いいえ。……さあ、始めようか」

彼も俺の前にあるテーブルにお茶を置くと、向かい合うように座る。

「どこまでやりましたっけ」

「なんだ、もう忘れたのか。最後に練習したのはいつだったかね」俺が師匠にここでお茶を飲みながら魔術の個人授業を受けるようになったのは、今から5年前といったところだろうか。最初はとても恐い人だと思っていた。――何故ならば、その当時、マジエークを怒らせた者は生きて帰っては来れぬという噂が、彼の家の周囲で流れて、俺はそれを信じていたからである。

――が、何年か師匠と一緒に魔術の勉強をしている間に俺はそのような噂は信じなくなった。師匠は、そんなことしない。だって、師匠は絶対怒らないし、魔術だっていつも優しく教えてくれる。それに、俺は彼の怒る姿を見たことがない。俺は思う。じゃあ君は師匠の怒っている姿を、その顔を、一度でも見たことがあるのかって――まあ、そんなことはどうでもいい。俺が彼に教わる魔術は一つしかない。

切取り魔術だ。

「そうですね……。5年ぐらい前でしょうか」

「もう、そんな前になるのか……。時というものは早いなあ」

彼の切取り魔術は、俺の通う学校で習う切取り魔術とは少し違う。どの辺が違うかという――。

「で、教えてくださいよ師匠。本当に覚えてないんです」

「ああ、そうだな。すまん、すまん」

師匠は一つ咳払いをし、俺を見る。

「前は……、花の散る木曜だったから、他で取ってきた花のオブジェクトを復元させる魔術を教えたはずだ」

「そうでしたね」

俺の学校で習う切取り魔術とここで習うその違いの一つとしてまず挙げられるのは、他所の国あるいは都市で切り取ってきたその土地で見たものの一部を、再現するという、撮影系切取り魔術。

まあ、カメラで撮ってきたものを専門店で現像してもらったところを自分で現像しちゃうというような魔術である。師匠曰く、これも切取り魔術の一種なのだそう。ちなみに、これは俺が師匠に初めてあったその日の最初の授業で教えてもらった切取り魔術で、俺の一番好きな類の切取り魔術だったりする。

「その魔術なら、もうマスターしたも同じですよ師匠。――で、今日はどのような切取り魔術を」

「そうか。撮影系切取り魔術は、基本中の基本だからな。しっかりと覚えときなさい。それでだな、今日は創造系切取り魔術を教える」
師匠が立ち上がった時、俺と彼一対一の特別授業が始まる――。

第1章出会い 04

授業は小1時間ほどで終わった。

「この創造系切取り魔術をマスターすれば、お前の妹・アリスは必ず目覚めるだろう」

師匠はそう言うなり、玄関で俺を見送った。

次に向かった先は、創造系切取り魔術で使う薬草だったが、これ
がなかなか見つからないらしく、取り扱っている店も少ない。

その中でも俺がとりわけ気に入っている店がある。店は師匠の家
からそう離れてはいなかった。歩道を真っ直ぐに進むと、左手に看
板が見える。

——薬草といえばマダムキャロリーナ

早速、その店の中に入る。

「こんにちは」

「おやおや、見ない顔だねえ」

店の主と思しきそのおばさんは、新聞を読みながら言う。

「ここに、覚醒の葉があるとマジエーク師匠から聴いたのですが

……？」

おばさんは新聞から目を離し、こちらを見るや、にやつと笑った。

「あんた、マジエークの弟子かい。その薬草なら、2000ロージ
だね」

代金を払い、覚醒の葉を貰うと、俺は店を出た。

「ちよつと待ちな」

背後で、先ほどのおばさんが叫ぶ声がした。

振り向くと、白髪交じりの髪を頭頂部に盛ったような髪型の、ふくよかな女性と、その隣に中学生ぐらいに見える真っ赤なワンピースを着た小柄な女の子がいた。

「何ですか？」

俺はおばさんの店の前まで引き返した。

「あんた、魔術師なんだろ。うちの子も、魔術師を目指して切取り魔術を勉強してるんだよ。あんたの技、この子に教えてやってほしいんだ。ちようど今、長期休暇中だね——」

「——ちよつと、おばさん。それは困りますよ。俺、急いでるの
で」

おばさんは俺の話なんて聞きもしない。

「——てことで、うちの子、よろしくね」

いつの間に用意したんだか、スイーツが女の子の隣に置かれている。

「ちよつと、おばさん……」

おばさんは既に店の中に入ってしまった。

——仕方ない。この子も連れて行くか。

「君、名前は？」

近くの喫茶店までこの子連れしてきた俺。まずは名前を聞いてみる。

「アーロット・メリーマン」

——珍しい名前だ。

「俺は魔鬼」

——一応、この場合は自分の名前を名乗るべきだろう。

「じゃあ、マトお兄ちゃんだね」アーロットと名乗る少女が微笑む。

「よろしくね、アーロットお嬢様」

——こうして、俺に一人、新しい友達ができた。

第1章 出会い 05（前書き）

予定通りに更新できず、すいませんでした。

第1章 出会い 05

その日、俺は偶々通りかかった案内所で地図を貰い、それを頼りに宿を探し、そこで二人寝泊りをすることにした。

新たに出来た友達であり旅仲間の、アーロット・メリーマンは自分が泊まる部屋の隣のスイートルームにしてあげ、俺は二部屋分の代金を支払った。

「ご飯は俺が魔術でつくるから、心配なくていいよ」

ロビーで向かい合って座る。

「ありがとう、お兄ちゃん」

テーブルの上に置かれたメニューを見て、適当に注文した。クリムメロンソーダとコーヒーはすぐに来た。

「でも、お兄ちゃん一人に任せっきりも悪いから、あたしも何か知ってる限りの魔術で手伝いたいな」

メロンソーダから漂ってくる甘い香りに笑うアーロット。……可愛い。

「今日からこういうことにしよう。アーロットちゃんはお嬢様、俺は執事。お嬢様は執事に言いつけをするけれど、お嬢様自ら何かをするってことはあまりないんだ。だから、君は手伝わなくてもいい……」

「——あたしはお兄ちゃんの手伝いをする事で魔術の勉強もしたいの！だから、手伝わせて」

二人の間を流れる空気が一瞬ラインを停止したように、俺は思った。——なるほど。そういうことなら手伝わせてもいいか。あんまり女の子に負担をかけるようなことはしたくないと思っていたため、多少の躊躇いはあるが。

「そうか……。そういうことなら、良いよ。でも、あんまり無理しちゃダメだよ。俺に言ってくれたら手伝うから」

また、アールロット・メリーマンの凛々しい眉が真ん中に寄る。

「女は強く生きなきゃダメなの！だから、出来る限りのことは自分でする。それに、お兄ちゃんも執事になる必要はない」

どうやら、俺の考えは、今日の前にいるアールロット・メリーマンからみれば、余計な世話らしい。

「わかった。じゃあ、お兄ちゃんとその妹ってことで。——その代わり、しっかり勉強するんだぞ」

「当たり前よう」

クリームメロンソーダがすっかり無くなったグラスとすっかり冷えたコーヒークップが揃ってテーブルの上に置かれた。

「じゃあ、あとでそっちの部屋に行くから待って」といて

「わかりました」

俺とアールロット・メリーマンはロビーで一時解散した。

第1章 出会い 05（後書き）

一人称と神視点が混在してますが、完結するまではどうかご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0779ba/>

ラストソード

2012年1月14日17時50分発行